一

今日は従弟と図書館で逢引する日だった。

小学校より高校のほうが遅く終わるし、遠いから、一刻も早く図書館に駆けつけたかったのだけど、教室を出ようとしたとことで「なに、急いでんだよ、カラオケいこーぜ、カラオケー」と喧しく厄介な友人に捕まった。

「急ぐから」の一点張りで振り切ろうとしたものの、ブレザーの裾を掴んで離しくれない。

引き剥がしても、別の部分を掴んでくるから埒がなく、結局「カラオケー、カラオケー」と喚かれ裾を引っぱられながら、校門まで出てしまった。

辺りにいる友人は助けてくれず「このごろ、お前つきあい悪いから」「たまには、かまってやれよ」と友人への援護射撃をしてくる始末だ。

一応、友人の一人だから「冗談じゃない」と言い捨てることはできなかったけど、このまま図書館についてこられるのは、御免こうむりたかった。

この友人に限ってではないものの、口うるさく、口が軽く、口が滑りやすい、三拍子揃ったこいつにはとくに、従弟を会わせるわけにはいかない。

校門を出たら、チョップで手を剥がし、すぐに走ろうと算段をしていたものの、一歩外に出たところで、向かい側の歩道に従弟を見つけた。

高校にくるのが、はじめてだったこともあり、驚いた俺は、従弟が駆け寄ってくるのを留めることができなかった。

迎えにきてくれたようなのが嬉しいのも否めず。

後ろで裾を引っぱっている友人のことは半ば、忘れて「どうした、何があった」とにやけそうになるのを堪えながら、声をかけた。

道を走ってきて、すこし息を切らす従弟は、口を開きかけ、背後にいる友人に気づいたらしく、一瞬、顔を強張らせた。

が、聡い従弟のことだ、俺の友人の手前とあって「今日の約束の事だけど」と慎重に言葉を選んで、話を切りだす。

「お母さんが急に、学校にやってきて、今日はこのまま、映画観て、食事をしようと言ってきたんだ。
それで、これから、待ち合わせ場所に行かなくちゃならなくて、だから」

言い終わらないうちに俺は「そっか」と笑いかけて「だったら、俺との約束はいいから」と従弟の頭を撫でてやった。

正直、今日はその気満々だったから、落胆しないでなかったけど、従弟が珍しく叔母と出かけられることを、喜ばしく思ったのも本当だ。

叔母が構わない分、寂しい思いをさせないように日々、俺と母親が従弟に目をかけやっているとはいえ、どうしたって、埋め合わせをしきれないのは、分かっている。

悔しいものの、少しでも従弟の寂しさを叔母が取り除いてくれるなら、それに越したことはなかった。

まあ、休みの日さえ構ってやらない叔母が、平日に外出をしようとするなんて、なにか思惑があってのこととしか思えなかったけど、従弟には何も言わず、笑顔も引きつらないように気をつけた。

ただでさえ、従弟は俺に申し訳なく思って、こちらの顔色を窺っているのだ。

これから叔母と出かける楽しみに、水を差すようなことをしてはいけない。

なんとか、気づかれなかったらしく「ごめんね」と言いつつも、「楽しんでこいよ」と頭を撫でていた手で頬を擦ったら、その指に頬づりを

して、微笑をした。

無邪気といっていい仕草と笑みが、下半身にすこし、きたものの、もちろん悟らせずに、何度も何度も振り返る従弟に、笑顔を絶やさず、手を振りつづけて見送った。

やっと従弟が道の角に曲がって見えなくなり、小さくため息をついたところで「フられちゃったなあ」と首に腕を回され、かるく絞められた。

すっかり忘れていた友人の存在を思い出し、あちゃあ、と思う。

友人はずっと背後にいてブレザーの裾を握ったまま、口を挟まず俺らのやりとりを、見聞きしていたわけだ。

普段、一秒も黙っていられない友人だから、遠慮したわけでなく、おそらく、従弟を興味深く眺めながら、俺がお兄ちゃんぶっているのに、さぞ、にやにやしていたのだろう。

「なるほどなあ、あんな可愛い従弟がいたら、そりゃあ、真っすぐ帰りたくなるよなあ」

案の定、茶化してきたとはいえ「可愛い」の言葉に引っかかって、肩を揺らしてしまう。

首に回している腕に振動が伝わって、気づいたろう友人は「は？」とむしろ俺が言いたいような、間の抜けた声をあげた。

「いや、そりゃあ、俺からしたら従弟だし、可愛いけどな、学校じゃ

モテないどころか、友達もいないっていうし・・・」

「あー、そりゃあ、周りに見る目のある奴がいないんだな。

たしかに？
前髪のせいで目元よく見えないし、俯いているから余計に、暗い印象が持たれるんだろうけど、髪かきあげたら、ありゃあ、美少年だな。

俺が見るに、お前の従弟とは思えないほど、顔面の偏差値が糞高いよ、あの子。
おまけに性格もしおらしくて、可愛いったらないね」

いつものように減らず口を叩いて、ぺらぺらと失礼なことも言っているけど「お前の従弟とは思えないほど」というのには、自分も納得し

ているから、反論ができない。

そうやって比べられて、けなされるより、従弟が誉められることのほうが聞き捨てならなくて「お前にはもう、絶対に会わせない」と首に巻かれている腕を引き剥がして、睨みつけた。

屁でもないように笑い返した友人は「俺を止められても、どうかな」と肩をすくめる。

「あの子、今は思いこみが激しくて、冴えない自分を可愛がってくれるのは、いとこのお兄ちゃんだけって、思っているかもしれないけどな。

他にも、可愛いって言ってくる人が出てきたら、分からないぞ？

お兄ちゃんじゃなくてもいいや、って思われるかもしれないな」

「お兄ちゃんじゃなくてもいいや」の言葉が胸に刺さって、同時に頭に血も上って、友人の胸を押そうとした。

察知した友人は飛びのいて、からからと笑いながら「俺だけが可愛さを分かっているつっう、驕りは捨てろよ」とおちゃらけたように手を振ってみせる。

それからスキップして去っていったものの、途中で「今度、お前んち、遊びに行っていい？」と言葉でも表情でも下心丸出しにしてきたものだから、俺は足元にあった石を広い、割と冗談でなく当てようとして、投げつけた。